

令和5年度 神奈川県立衛生看護専門学校 学校関係者評価委員会 議事概要

日 時 令和5年6月28日（水）15時00分～16時30分

場 所 衛生看護専門学校 会議室

1 校長あいさつ

○ 田中校長よりあいさつ。本校は、昭和40年に創立してから58年目を迎える。「教育の質」という面では、創立以来の伝統を受け継ぎながら、両学科とも例年高い国家試験合格率を挙げており、また、就職についても地域の看護、助産を支える人材を送り出し続けている。これは、教職員が、日々、学生への「丁寧な指導」と「きめ細かなサポート」を積み重ねてきたからこそであり、「確かな教育」は本校の誇りであると思っている。

昨今、看護師、助産師の養成をめぐる環境も変化がみられる中、本日は、大所高所から、委員の皆様の忌憚のない御意見をいただくようお願いする。

2 趣旨説明

○ 市之瀬副校長より、本委員会の趣旨説明。これまで、教育活動及び学校運営について自ら評価を行い公表してきたが、このたび、さらなる教育の質の向上に資する事を目的として、自己評価に加えて、学校関係者評価委員会を設置して、学校関係者による評価を行うこととした。

3 議長選任

○ 学校関係者評価委員会要綱第4条第1項に基づき、校長が議長を選任。議長は、林田委員。

4 委員及び教職員紹介

○ 委員及び教職員紹介は省略

5 学校評価について

(市之瀬副校長)

○ 配付資料に基づき説明

【令和4年度の取組】

- ・ 令和4年度の入学生から新カリキュラムが適用されている。看護学科では、旧カリキュラムで入学した2・3年生が単位を修得できなかった場合、新カリキュラムの科目へ読み替え、補習講義や補習実習によりサポートしてきた。また、新型コロナウイルス感染症が拡大の中でも、学生に不利益が生じないように、教育活動を継続・実施した。

【自己点検・自己評価】

- ・ 専修学校における学校評価ガイドラインに基づき、平成22年度から自己点検・自己評価を開始し、今年度は、教育理念・目標など10の大項目と、59の小項目について、各項目4点満点で評価を行った。
- ・ 本校における新型コロナウイルス感染症対策により安全な学習環境を提供して、新・旧カリ

キュラムの学修に支障のない教育活動が運営できた。一方、コロナ禍により地域住民との交流が減少していること、ICTを活用した教育を行うためのWi-Fiが整備されていないこと、入学者数が減少傾向にあることは、課題である。

【学校評価報告書】

重点目標1「入学生から適用の新カリキュラムを円滑に運営する。」

評価項目「新カリキュラム」

- ・ 助産師学科では、新カリキュラムでは、妊娠中からの継続受持ち実習は、助産院に加えて病院でも行えるようになり、フレキシブルな対応が可能となるよう実習方法を変更した。特に分娩介助については、24時間体制であり、土日祝日もオンコール体制の実習となる事から、学生の体調管理及び精神的サポートを行った。分娩介助は10回程度行う事となっているが、9～10回行う事ができた。
- ・ 看護学科では、旧カリキュラムの単位未修得者については、カリキュラムの読み替えや補講を行い、1年次開講科目については、全員が単位修得に至った。

重点目標2「新型コロナウイルス感染拡大により、学生に学習上の不利益が生じないよう学習内容の充実と教育活動を円滑に実施する。」

評価項目「新型コロナウイルス感染拡大対策」

- ・ 学生の継続的な健康管理等を実施し、クラスターの発生はなかった。今後も対策を継続する

評価項目「講義」

- ・ 助産師学科では、新型コロナに感染した学生に対し、登校直後に補講・追試験を実施した。
- ・ 看護学科では、必要時に遠隔授業を実施した。単位未修得を昨年度と比較すると大幅な変化はみられなかった。学習成果として対面授業との差はなかった。

評価項目「実習」

- ・ 助産師学科では、一部の学生は同日に複数施設での実習を行う事があり、教員のタイムリーな助言がしづらいという課題は残った。
- ・ 看護学科では、一部の日程で学内実習に変更となったものの、大方は、各実習施設の感染拡大防止対策に則って臨地実習を行い、全員が実習目標を達成した。

評価項目「学生支援（学年）」

- ・ 学生相談は、スクールカウンセラー2名と教育担当副校長が担当した。3年前からスクールカウンセリングをネット予約できるようにした事で、利用者数が増加している。
- ・ 助産師学科では、24時間待機での分娩介助や継続事例の休日・時間外での実習等があり、心身ともに負担があるので、御家族とも連携を密にし学生を支えてきた。
- ・ 看護学科では、対面での授業参観、保護者面談や祖父母面談、三者面談など学生の課題や状

況に応じて対応した。また、入学時には、保護者向けに学校生活や教育活動についての詳細を文書で配付し、学生の学習を支援するよう協力を依頼した。

評価項目「学生支援（国家試験）」

- ・ 助産師学科では、入学前から課題を送付し、入学後に提出された課題の取組み結果を踏まえ、理解が不十分な学習項目を補うなど、その取組みを強化した。
- ・ 看護学科では、各学年4月に国家試験ガイダンスを実施している。今年度、学習サポートチームを立ち上げ、丁寧な学習サポートを実施している。

評価項目「学生支援（就職試験）」

- ・ 助産師学科では、令和3年度より民間事業者の就職活動ガイダンスを取り入れている。
- ・ 令和4年度卒業生の県内就職率は、助産師学科では92.0%（23名/25名）、看護学科では95.3%（61名/64名）で、ともに100%ではなかった。県内での就職について意識付けを行い、学生を支援する。

6 意見交換

(1) 新カリキュラムについて

(金井委員)

コロナ禍の実習というのは学生側も受け入れる側も初めてだったので、混乱もあったが、特に大きな問題はなく進められたと思っている。新カリキュラムになって変化というのは特に感じなかった。

(川上委員)

産科の看護病棟で母性の学生を受け入れているが、コロナ禍においては急遽実習を中止したケースとか、実習時間の短縮とか、お互いの状況を確認しながら進めてきた状況がある。新カリキュラムになったから何か変わったということはない。

(小野教育担当副校長)

助産師学科は、新カリキュラムになっても、大きな変化というのは、看護学科ほどはない。分娩数・分娩予約数の多い病院とそうでない病院と様々なので、実習期間内でできるよう打ち合わせを密にしながら取り組んだ。

(木下委員)

当院では1年生から3年生まで受け入れており、新カリキュラムで学ぶ学生と旧カリキュラムで学ぶ学生が混在したという事だが、特に混乱はないように見えた。

(大堀看護学科長)

令和4年度は新カリキュラムの実習はなかったもので、特に混乱はなかったと思う。

(菊住委員)

臨床心理学、人間関係、コミュニケーションを担当している。新カリキュラムの実施に伴う大きな変化、疑問等はなく、学生がこれからどう変わっていくのか見ていきたい。

(林田議長)

看護と助産師の関係法規、社会保障制度を担当している。分娩介助をほぼ10件やれたのはすごいと思う。また、講義についても全員単位修得できている。さらに、新カリキュラムの読み替えができない5科目については、補講されたということは、素晴らしいと感じている。学生も大変だが、先生方が大変だったと思う。

(2) 新型コロナウイルス感染症拡大対策について

(木下委員)

実習が出来なくなることはなかったが、途中で発熱者が出たり、施設側がクラスターになってしまったことがあった。色々な事があったが、一緒に乗り越えられて良かったなど思っている。

(菊住委員)

グループワークや演習の形式の授業が、どの学校でも1年生からあって、その際にどれくらい講義をするかという所がすごく難しいと思っていたが、学校の方針を示してくれたので、助かった。これからはコロナが無くなったわけではないので、節目で発信してくれるといいと思う。

(金井委員)

訪問看護では、訪問先は限定されているため、看護師や自社のセラピストは、病院と比べると安心感があった。学生の実習を受け入れることについては、断る方はいなかった。利用者さんは訪問看護が来るという事に安心感を持っていてくれたと感じた。学生が「こういう状況の時に実習させてくださってありがとうございます」という事を言っていて、そういう所が非常に評価できると感じた。

(川上委員)

当院の産科病棟の実習について、コロナ禍で、お産の立ち合いや、家族の面会ができない状況もあったので、家族の思いを想像し、実習を中止したケースもあった。そこはご迷惑をおかけしたと思っている。学生は本当に真摯で、先生方の指導が良かったのだと思うが、「こんな状況の中で私達の実習を受け入れてくださりありがとうございました。」と、丁寧に挨拶してもらい、こちらも受け入れようという気持ちになった。

(林田議長)

クラスターが発生する事もなく、予防もできていて、言うことはない。5類になり、気持ちが緩んでくるので、気を付けないといけないと思っている。

(3)「講義」について

(林田議長)

新型コロナで休んだ学生への対応も、補講とか追試をすぐにやったおかげで、単位の修得が漏れることなく進んだという事はよかったと思う。また、対面授業でも遠隔授業でも学習成果に差がみられなかったというのは、学生の頑張りもあつたろうし、先生方の頑張りもあつたと思う。自己点検評価の中にあつたが、コロナだから遠隔で授業を行うというのではなく、今後も何が起こるかわからないので、コロナの方法をうまく活かし、風邪で休んだ時など、学校に来なくてもオンラインで受けられるよう、最低限Wi-Fiの整備が必要だ。最近の学生は教科書などもデジタルで、iPadに全部入れている。また、できれば、teamsとかclassroomとかを使って資料をアップしたい。資料を添付して、双方向で話ができるとよい。単位未修得者も少ないし、成果が上がっているかなと思う。

(4)「実習」について

(木下委員)

地方の学校から来た学生だと、ほとんど実習に行けていない学生がいて、本来なら実習で体験するようなショックを、現場に来て体験する方が結構いる。そういう意味では、実習が大方実施できたのは素晴らしいと思っている。

(5)「学生支援(学年)」について

(金井委員)

実習が始まる際に、学生の個別の状況について、担当教員の方から情報が入るので、留意しながら関わるようにしている。コロナ禍だからという訳でもなく、他人の家に行く機会が無いという話を聞く。連絡手段はスマホで、対面で話をする就非常緊張する学生が多かったという印象だ。うまく言葉で表現できない学生だったら、どう指導したらよいかという事を考えて対応するようにしている。

(川上委員)

学生相談の予約をネットでできるようにしたのは、とても良いことだと思う。通常は実習のストレスや学習についていけず、退学するケースが多いという特徴があるが、他校の学生の話聞いてみると、コロナ禍で、実習に行く機会が少なくて、自分と向き合う機会や同級生と触れ合う機会が少なかったという事もあるのかなと思っている。退学者の推移とか、理由などあれば伺いたい。

(大堀看護学科長)

令和4年度に関しては、退学者数の推移は例年と変わらない。特徴としては、大学卒の学生がかなり退学した。元々違う方向で働きたかったということだった。その他の理由としては、ほぼ進路変更だが、学力不振が2名程、メンタル面で付いていけないという学生が2名程いた。全員で14名の退学者が出た。

(木下委員)

実習を受け入れるに当たり、こちらは教育現場の事がよく解っていないし、初めて実習場に来るとい先生方もいると思うので、可能であれば事前にお互い解り合う場を持てたら良かったなど考えた。例えば、実習前に先生方に現場を見てもらうとか、当院の指導者が学生と事前に触れ合う事ができると、スムーズに行くのかなと思う。

(小野教育担当副校長)

実は日本鋼管病院さんとは、10年以上前になるが、老年看護学の演習にスタッフとして入っていた時代の時期もあった。学校でこういう準備して実習に行っているということと一緒に見ていただいた。そういう事を復活させた方がよいか。

(菊住委員)

私は臨床心理士でもあり、臨床心理学の授業で学生相談の事例なども扱うので、授業の後によく学生が相談に来る。内容はだいたいプライベートな家族の話であったりするが、スクールカウンセラーに話をしないのかと聞いてみると、学校の相談室は、授業のことや将来の方針など学校の話をするべきところと思込んでいる学生が結構いる。そこで、56名が利用し36件のメール相談を受けたという事だが、相談内容はどのようなもので、公表しているのか、学生がどういう目的で、どういうニーズがあって予約しているのか伺いたい。

(小野教育担当副校長)

内容は多岐に亘る。学校の事しか相談できないと思っている学生も居るとい事は、インフォメーションが不足していると思っている。インフォメーションの仕方をもっと全般的に見直したい。

(菊住委員)

退学者の件は、色々な学校で問題になってはいるのだが、入学してみたら違うという事で、他の学校に行ってもいいのかなという感じで1年生が退学していくと思われる。入学時に学生生活をきちんと理解している学生に来ていただくと、入ってからの退学相談への対応が楽になると思う。

(小野教育担当副校長)

学校説明会、少人数見学会等で学生生活について説明しているほか、2年前から、入学前ガイダンスを行っていて、保護者の方にも学習内容、学校生活をはじめとして、高校とは違うという事をお知らせしている。助産師学科では、お手紙をご家族にお渡しするのと、看護学科では授業参観や保護者を学年で行ったり、親御さんの心配事や学校生活に対する疑問等は各担当教員が丁寧に聞いている。

(林田議長)

カウンセリングを行っている学校は増えている。LGBTQのような悩みを持っている学生は、なかなか声に出せない。また、情報管理についてだが、カウンセリングをした時に、そこで得た情報をどこ

まで、どの先生までなら出していいのか、それはその学生に聞いて管理をきっちりしないと、一旦出てしまうと取り返しがつかない事となる。

1年生の退学者が多い件だが、色々な理由があると思うが、入試の面接の時、学習の厳しい面をきちんとと言ってもいいのかなと思う。

(6)「学生支援（国家試験）」について

(林田委員)

国家試験合格率が、助産師学科が100%で看護学科が98.5%であり、ずっと積み重ねて先生方がやられている中でこういう成果だと思う。

(川上委員)

看護学校の先生は国試対策を熱心に行っているのだから、落ちる学生が少ないのかなと思う。採用試験をやっていると、その学生の成績がどのくらい分かる。成績は非常に気にしている。

(市之瀬管理担当副校長)

学力について、本日欠席の新倉委員から「入学時の学力診断や学習サポートなどの取り組みを進められている事は大変良いと思う」「入学前の学習課題（中高校の数学で看護の学習に必要な内容など）を出して、高校在学中に高校の先生方のご指導の下で看護学校入学準備のための学習に取り組む事を求めても良いのではないかな」という御意見をいただいている。

(小野教育担当副校長)

入学前の課題については、看護学科も助産師学科もやっている。看護学科では、今までは希望制だったが、最近の入学してくる学生達の様子を見ると、特に指定校推薦というのは秋に入試が終わるので、入学までの半年間をどう使うかで、看護学校に入ってから学習の状況が変わってくる。入学前の学習準備について、今後検討して早くに取り入れていきたいと思っている。

(川上委員)

採用試験の時に成績証明書を出してもらおうと、1年次の成績の低い学生が結構いて、聞くと学習の仕方が分からなかったという学生が多く、それを2年次、3年次で挽回したという。1年次の「学習の仕方が分からない」という状況の学生達を早めに察知をして対応されるという事はあるか。

(小野教育担当副校長)

本校は、3年制なので、大学と違って1年短い分、入学時から国試対策をしている。看護の勉強以前の問題で、計算や読解力が弱いという事は何年も前から分かっている、今までは学年の教員が対応していた。今年度は、学習サポートチームを4名で組んで、1年生から3年生までに対応できるようにした。これから本校にはなくてはならないチームだと思っている。高校生までは学習習慣がなかったという学生には、早く対応して、3年間で看護師の資格を取るという目標を達成できるように、これからも継続していきたい。

(7)「学生支援（就職試験）」について

(木下委員)

採用面接に来る学生達を見ていると、面接の仕方やエントリーシートの書き方をよく指導されているなどという事は実感としてある。ただ私達としてはそれ以外の事を聞きたいなど思っているのですが、そこを外して質問すると答えられなかったり、暗記した事だけを答えたりという事が多いのかなという印象は持っている。

(菊住委員)

どんなセミナーやガイダンスを学生にしているのか。

(大堀看護学科長)

3年生に上がる前2月から3月にかけて、マナー講座やエントリーシートの書き方であるとか、模擬面接を外部に依頼して、実際に来ていただいて面接を実施するという事をやっている。全員参加で、2年生のうちからやっている。

(菊住委員)

最近、エントリーシートは chatGPT で出来てしまうといった事もあり、皆同じになってしまったりとかで、そうでないものを突っ込まれると答えられなくなってしまう。学生たちは、かなり練習してくるようだ。衛生看護専門学校は、流石だねと言ってもらえるような所があるといいなという思いがある。

(大堀看護学科長)

エントリーシートについては、看護学科では、何が言いたいのか、求められていることと整合がとれているか、教員が学生に指導している。

(古賀助産師学科長)

助産師学科では、昨年から、ガイダンスをはじめた。エントリーシートの記載の指導は、強化している。また、助産師学科の学生は明確に助産師になるという動機を持っているので、自分は何がしたいのかという事を、全教員が入学時から学生と話をし、方向性を確認しながら相談にのっている。

(大堀看護学科長)

3名の学生が県外に就職しているのだが、美容系の就職で、これも最近の学生の特徴である。

(川上委員)

最近大学からの就職希望が増えているが、実際に面接してみると、エントリーシートや申込書類に差は無いが、大学生と看護学校の学生を比べたときに、看護学校の学生の方が、自分の意見を言う力は弱いと感じる。

(林田議長)

衛生看護専門学校は県立の学校なので、100%県内に就職してほしいと思っている。私立の四年制大学や三年制の短大に比べると、学費に差があり、県立の専門学校は安い。差額は県が税金でカバーしているのだが、県が税金でカバーしていることを、入学前から説明してもいいのかなと思う。一生神奈川県で暮らすというのは、わからないが、当座、神奈川県でと考えてくれた方が、一般県民も納得できる。

(小野教育担当副校長)

そのことは、入学前から言っている。入学前、入学式でも入学してからも、県立の学校なので、県内でと言っている。

(林田議長)

今年の看護学科の入学者、79名というのは確かか。

(小野教育担当副校長)

2月28日に一般入試の2次募集を実施して79名となった。

(林田議長)

そうだとすると、定員が120名なので、充足率が66%となり、おそらく私立大学だと経営の危機になるくらいの数字だと思う。どこかで魅力を感じさせる学校にしていかないと。今、どこの学校も、少子化で困っている。特徴として、国家試験合格率が高いことはホームページに載っているのだからわかる。あとは入試科目だが、一般入試は、国語と数学だけになっている。数学が苦手な学生もいる。例えば、国語と数学と生物を入れて、選択でもいいし、入試科目を増やした方が受験生は増える。

それと、ホームページはすごく大事で、今、高校生は入試情報をとるのは、95%がホームページからだ。それと高校生は、口コミがすごい。入試科目を見る前に口コミを見て選んでいる。

また、パンフレットに助産師学科の学内公募推薦のことが書いてある。助産師になりたい高校生は一定数いる。その学生達が助産師になるとすると、専門学校だと3(年)+1(年)でいける。ところが、四年制大学に行くと大学院まで行く必要がある。大学4年間の中で看護と助産の両方を学べる場所は、今は、北里大学とか、関東地方に2~3校しかない。そのため、それは結構、売りになるのではないと思う。学内公募の制度があると書いてあるけど、入試の実施状況を見ると、学内公募の制度を利用して入学した学生は、今年ゼロになっている。

希望者がいなかったのであれば、ゼロは当然だと思うが、これをもっと大きくホームページに載せるとか、学生の興味を引きそうなところを発信していった方がいい。

(小野教育担当副校長)

学内公募がゼロというのは、すごく衝撃を受けている。希望者は10人以上いた。しかし、学内公募の成績要件に満たなかった。本校の看護学科に入学後の学生に面接をすると、3分の1くらいが入学理由を助産師学科があるからと言う。しかし、本校の学内公募の要件は、非常に厳しい。助産師学科があることで、本校看護学科を選んだ学生にとって、看護学科に入っても助産師学科につながらないのであ

れば、本校を選んだ意味がなく、問題と思っている。今年、学内公募入試受験者が0人というのを受けて、令和6年度の入試から、学内公募の要件を緩和した。

(林田議長)

助産師学科は、指定校推薦は面接のみ、一般入試は2科目で外部から入ってこられる。内部からの方が有利で入れていいはずなのに、厳しくなっているというのは、せっかく、いいコースがあるのに、もったいない。

(小野教育担当副校長)

そういう御意見はたくさんいただいている。あとは、学校がどう考えて、学生に魅力ある学校にしていくというところが、一番取り組まなければならないところだと思っている。

(林田議長)

最後に、本日の各委員からの意見を受けて、今後の学校の改善になればいいかなと思う。

7 事務連絡

- 本日いただいた御意見は、報告書に反映させ整理し、9月頃を目途に県のホームページで公表する予定。
- 田中校長より謝辞を述べ、閉会。

以上